

この心如来となる

お釈迦様(ブツダ)のさとり道  
釈尊 出家への告白

無明に覆われたところとは、苦悩があるから、苦悩から逃れようとする。逃れる方法として「穢土を厭い離れて浄土を欣求する」＝自殺

「煩惱を断じて、涅槃を得よう」＝すべて断ち切る。捨身・捨命・捨財をもって修行に入り、苦しまない世界に入る。この二つが聖ならざる願望と気づいた。

(稲津紀三著「印度哲学史」p.95)

人は、肉体に病のあるときには、肉体的に不快を感じず。不快から救われるためには、病を治すよりほかはない。もし、不快を覚えなかつたら、病もあつてもわからないし、わかつても治療を急ぐ気にはならないだろう。不快感、病のあることを知らせて病根を除くことを促す生命の警告のようなものである。人生には大小の苦しみが無数にあるのだが、大抵は深くも考えずに過ごしてしまふ。

しかし、時にはどうしても平気で過ぎせない大きな苦痛に出会うことがある。生死の問題、愛別離苦、罪悪の呵責などである。そのときには、精神の根本に存している無明の病根を抜いて、長い間積もってきた悪業・煩惱の病毒を消滅させてもらうよりほかに、苦痛を離れて安穩を得る道がない。

仏陀の教えは、苦痛の根本を解決して、もう再び病むことのない慈愛と喜びに充ちた心身を得させようとする。これを「識身を捨てて法身を得」「自然虚無の身、無極の体を受く」などいつている。そして、人生の苦しみや、愚かさからおこす種々のつまずきは、人をひたむきに覚りの道に向かわせ、尊い機縁になるので、仏陀は苦と苦を招く一切の人間の過誤を、ことごとく「聖なる真実」と説かれたのである。それが比類なき四聖諦の教えである。

釈尊の出家理由には二つある。

一つは、インド全土がまだ統一国家の形態になつておらず、種族単位の大の世襲の王家が都城を築き、自族だけの繁栄をはかつて互いに覇を争っていた。自国が滅亡しないために、他国を攻める。この極限の中で、釈尊は階級を超え、民族を超え、慈愛と正法をもつて、人類を包容する大精神は、王者の理想と一致し、生前より「世間の眼」「人天の尊師」として、インド諸王の帰依を受けていた(印度哲学史P.34)。城を出たのは、武器を持って戦うべきでなく、話し合いをもつて人類包容する慈愛の正法を教え示すために、自分が王となつて得る表面上の幸福なるものを断ち切り、執着なく出家をした。

もう一つは、釈尊は、苦悩はそのままにして、無くそうとせず、苦悩には苦楽の原因の基があり、その苦悩を招

いた原因がわかれば、また予測ができれば、解決のために願をもつて忍耐・精進ができる。その結果、苦悩が滅し、再び病むことのない慈愛と喜びに充ちあふれた誰でもが思いやりのある仏陀(目覚めたひと)と化す。この真実への求めで、黄衣をもつて家なき出家者となつた。今、自分自身を語り、自分自身を法灯明の証人として求める人々に「苦は聖なる願望」の心を喚起させ、その願望の成満に導こうと願つて、誓われた出家となつた。

釈尊のお言葉(聖求経より)

また比丘らよ、「聖なる願望」とはどのような願望であるのか。

比丘らよ、ここに誰かある一人が、自分自らに(自分で)生という法を有しながら、その生法において過患(過誤不安、禍)であることを知つて、不生なる無上の安穩涅槃(無上の安穩なる幸いに結びついている涅槃)を欲し、自分自らに老という法の(涅槃)を欲し、自分自らに老という法の老法、病法、死法において、過患であることを知つて、老無き、病無き、不死なる無上の安穩涅槃を欲する。

また自分自らに憂苦という法、雑染という法を有しながら、その憂苦の法、雑染の法において、過患であることを知つて、憂苦無き、雑染無き無上の安穩涅槃を欲する。これが「聖なる願望」である。

釈尊のお言葉(聖求経パーリ語原文より)

カタマー チャ ビックハベー アリヤー パリイェーサナー イダ  
Katamā ca bhikkhava ariyā pariyesanā? Idha  
what 比丘らよ 聖なる 願望 ここに  
ビックハベーエーカツチヨーアツタナー ジャーティ ダン モー サマーノ  
bhikkhava ekacco attanā jā ti-dhammo samāno  
比丘らよ 誰かある一人が自分自らに 生という法 有しながら  
ジャーティダンメー アーディナバム ビディトパー アジャータムアヌツタラム  
jātidhamme ādinavaṃ viditvā ajātaṃ anuttaraṃ  
生法において 過患であることを 知つて 不生なる 無上の  
ヨーガツケーマム ニツパーナム パリイェーサティ アツタナー ジャラー  
yogakkhemaṃ nibbānaṃ pariyesati, attanā jarā-  
安穩 涅槃を 欲する 自分自らに 老  
ダン モー サマーノ ジャラーダンメー アーディナバム ビディトパー  
dhammo samāno jarādhame ādinavaṃ viditvā  
という法 有しながら 老法において 過患であることを 知つて  
アジャラムアヌツタラム ヨーガツケーマム ニツパーナム  
ajaram anuttaram yogakkhemaṃ nibbānaṃ  
老無き 無上の 安穩 涅槃を  
パリイェーサティ アツタナー ビヤーディダン モー サマーノ  
pariyesati, attanā byādi-dhammo samāno...]  
欲する 自分自らに 病という 法を 有しながら.....  
アヤーディム アツタナー マラ ナ ダン モー サマーノ  
ahyādhiṃ..., attanā marana-dhammo samāno...  
病無き..... 自分自らに 死という 法を 有しながら.....  
アマタム アツタナー ソーカ ダン モー サマーノ  
amatam..., attanā soka-dhammo samāno...  
不死なる..... 自分自らに 憂苦という法を 有しながら.....  
アソカム アツタナー サンキレーサダン モー サマーノ  
asokam..., attanā saṅkilesadhammo samāno  
憂苦無き..... 自分自らに 雑染という法を 有しながら  
サンキレーサダンメー アーディナバム ビディトパー アサンキリッタム  
saṅkilesadamme ādinavaṃ viditvā asaṅkilittham  
雑染という法 過患であることを 知つて 雑染無き  
アヌツタラム ヨーガツケーマム ニツパーナム パリイェーサティ  
anuttaram yogakkhemaṃ nibbānaṃ pariyesati.  
無上の 安穩 涅槃を 欲する  
アヤム ビックハベー アリヤー パリイェーサナー  
Ayaṃ bhikkhava ariyā pariyesanā.  
This 比丘らよ 聖なる 願望